

故郷の風景

(砂子瀬宮元地区—平成 18 年秋の風景)



「ふるさと」 F 120 号・アクリル・平成 23 年制作

■ 私は昭和 18 年に砂子瀬に生まれました。昭和 32 年春、目屋ダム建設により、私の家族は弘前に移転を決断しました。中学 2 年生の春から弘前第三中学校に転校するまでの少年時代を、この故郷で過ごしたのです。こちらのモチーフは皆、暮らしの中で私が目にしたが育った物ばかりです。もちろん糸をつぐむ道具などはもう使われていませんでしたが、まだ廊下の片隅に置かれていました。母が作ったわら靴（しべ）を履いた記憶もあります。仕事着は母が着たもので、いまでも大切に保管してあります。ビー玉は美しくて、いつも希望のあかしでした。



「残照—砂子瀬芦沢地区」 F 100 号・アクリル・平成 16 年制作

■ 平成 16 年 10 月 30 日の風景。この地は目屋ダム以前は八光の地名だった。鉱山跡に由来する。集落の人々の立ち去った屋敷の庭に、春はコスモスが咲いて主を探していた。が、3 年目は猛烈な勢いで襲う野生に吞まれた。この道の右手には、目屋ダム移転時に建てられた砂子瀬小学校の校舎が立ち並んでいた。

ごあいさつ

■ 平成 22 年 9 月私は弘前市の田中屋画廊で「砂子瀬・残照の故郷を描く」と題して個展を開きました。たくさんのご来場の方々の多くの方とは、目屋ダムと津軽ダムで移転された故郷の人たちでした。

砂子瀬の大先輩で当時 80 歳の佐々木武作さんは、3 時間半にもわたって私の拙い絵を、何度も何度も廻ってご覧になりながら、溢れるように思い出を語って下さいました。みな心に深く残りました。あろうことか個展が終わってまもなく、武作さんの訃報がとどいた時は大きなショックを受けました。しかしそのうち、武作さんはあの日「ご自分の人生の終わりにもう一度、故郷に遊んで下さったのでは？」と思った時、私は故郷の絵を描いて良かったと思いました。同時に「故郷の絵には大きな力がある」ことに気付いたのです。

いらい移転された方々はもちろん誰もが、いつでも気楽に観て、思い出に浸っていただく場があって良いのでは？と思うようになりました。思案する日々の末、この旨を、村教育委員会教育長の長利允弘先生に打ちあげたのです。

先生は私の思いを即座にご理解して下さい、ただちに当会場での常設展示案を関和典村長に提案して下さいました。ご快諾下さったとお聞きした時は本当に嬉しく思いました。心より感謝申し上げます。

今、白神山地のブナ原生林から雲を遊ばせて広がってくる青い空。古来積年の大願を成就させて、津軽白神湖は美しい湖面に郷土の新しい未来を映し始めました。時に、その湖底にかつて白神の山々を闊歩した祖先たちとその末裔たちの、1 万 1 千年余の暮らしの歴史があったことに、思いを馳せていただければ誠に幸いに存じます。



「美山湖の秋—砂子瀬宮元地区」 F 120 号・アクリル・平成 11 年制作

平成 11 年 9 月 18 日の風景。橋向こうの集落は目屋ダムで移転した人たちの再興した集落の一つ。中央、半島のように突き出たところに、木造の砂子瀬小、中学校の二つの校舎と講堂があり、ブランコと鉄棒のある校庭があった。2 本のソメイヨシノが津軽ダムに没するまで咲きつづけた。移転後はお祭り広場となり、真中に 4 本柱のやぐらが建ち、小さなステージ小屋と木造ベンチの庵があった。手前に浮かぶ大地はかつての砂子瀬集落の廃墟で、県埋蔵文化財調査センターの発掘では多くの石棺墓が発見された水上(2)遺跡のあたり。



「湖底に眠る風景」 F 120 号・アクリル・平成 9 年制作

■ 昭和 31 年ごろの砂子瀬集落全景。中央の田んぼが終わるあたりが山神平集落で、今は津軽ダム堰堤が聳えるあたり。手前の川は岩木川。右手が上流で川原平、焼山集落とつづき白神山地源流へ向かう。合流する川は尾太岳方面から流れてくる湯ノ沢川。

■ 砂子瀬集落は、昭和 43 年に津軽書房から発刊され、民俗学会において一躍脚光を浴びた、故森山泰太郎先生の「津軽の秘境・水没山村の民族記録—砂子瀬物語」の舞台である。かつて私は少年のころ、画面右下の岩木川に架かるつり橋を渡った。さらに急な山道を登りつめればそこに広大な畑地が広がった。近年の発掘調査はその鬼川辺 (1) 遺跡で、約 15,000 年前〜から 11,000 年前の土器を掘り当てた。砂子瀬物語とは、縄文草創期に端を発した人々が、壮大な営みの果てにたどりついた昭和で、その末裔たちによって語られた最後の記録といえよう。



「記憶の風景—川原平」 F 100 号・アクリル・平成 13 年制作

■ 平成 13 年冬の津軽ダムによる移転直前の風景である。道の奥左手の小道を進めば乳井貫の顕彰碑が建ち、さらに奥を右に進んで大沢川の橋を渡れば、明治の開拓者斎藤主が拓いた焼山の地が広がる。氏ゆかりの「主の塔」が山の中腹に聳え、麓の鬱蒼とした木立の中に住職を務めた「広泰寺」が今も清楚に、かつ毅然と建ち続ける。道は暗門の滝、世界自然遺産白神山地へと続く。